観光地における日本語とインドネシア語の禁止サインの比較

金沢大学大学院
ムティ・アフィファー

1. はじめに

禁止行為は，対面的な場面では，Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論から見ると，相手のネガティブ・フェイスを脅かす行為(FTA)となる可能性が高く，その発話には慎重な配慮が必要となる．禁止行為の中に，対面的なコミュニケーションだけではなく，不特定多数の相手とする言語景観の看板なども人間のコミュニケーションである(Schulze, 2020)．本研究では，発信者と受信者の間に待遇表現が出現しやすい観光地における日本語とインドネシア語の禁止サインを比較し，その理由を考える．日本は，単一言語国家である一方，インドネシアは多言語国家である．また，日本語には敬語体系が存在している一方，インドネシア語には敬語体系が存在していない．このような違いによって，日本語とインドネシア語のコミュニケーション方法は異なるのではないか．この違いをインドネシア人日本語学習者に教える必要があると考えられる．

2. 禁止サインの定義

本研究では，禁止サインを「相手が何らかの行動をしないように命令したり，依頼したり，するためのサイン」だけでわないく，「相手の行動を制限するサイン」と定義する．以下の画像を参照．

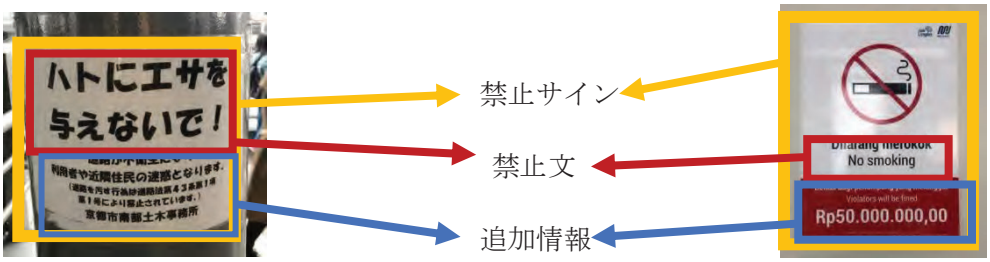

図 1. 日本語の禁止サイン　　図 2. インドネシア語の禁止サイン

3. インドネシア語について

インドネシア統計局のデータによると，2015 年のインドネシア総人口は 2 億 5518 万人，世界第 4 位の規模である．その中から，350 あまりの民族が存在し，多民族国家と言われている．また，それぞれの民族はそれぞれの言語を持つため，多言語国家とも言われている．様々な言語が話されている中，公用語としてインドネシア語が存在している．歴史的に，インドネシア語は元々スマトラ島におけるマレー語で，商人たちの古来のリンガフランカとして使用されていた．そして，インドネシアの独立宣言日（1945 年 8 月 17 日）の翌日に，憲法の中でインドネシアの公用語として定められた．しかし，日常コミュニケーションでは，地方語（民族語）の使用に比べて，使用率がかなり低い（インドネシア語 19.9%，地方語 79.5%，外国語 0.3%）

4. 先行研究

中崎(1999:183)は，禁止サインは，社会的ルールや常識，衆多の支持などを背景とするものが多いため，配慮した表現は必要ではないと示唆した．しかし，岸江（2011），倉林（2020），ムティ（2021）の研究では異なる結果が見られる．岸江（2011）は，禁止サインは様々な表現が用い，直接的な警告を用いるサインがある一方，直接的な表現を避け，工夫を凝らした表現を禁止サインも見られると主張した．そして，倉林（2020）は，禁止サインの受信者は客として意識される場所では，受信者のフェイスを維持できるような表現を選択する一方，大学の禁止サインの発信者は大学側であり，受信者は学生であると意識されているため，受信者のフェイスを侵害してしまうリスクが低い．また，生命の危険に及ぼす行為の場合は無待遇の剥き出し禁止表現が使われると主張した．最後のムティ（2021）の論文では，鉄道駅にある日本語とインドネシア

語の禁止サインを①効率優先型禁止表現（あからさまに表現する，例：「開放禁止」，「わたるな」），②効率優先型非禁止表現（禁止表現を使わずにあからさまに禁止させる，例：「手すりにつかまる　歩かず立ち止まる」）③配慮優先型禁止表現（配慮が入る禁止表現，例：「荷物から手を離さないでください」，「駐車はご遠慮下さい」），④配慮優先型非禁止表現（禁止表現を使わずに配慮しながら禁止させる，例：「自転車は降りて通行して下さい」，「この階段は避難専用です」）の 4 つに分類した．つまり，岸江（2011），倉林（2020），ムティ（2021）の研究では，日本語の禁止サインの表現には配慮表現を用いる禁止サインが存在し，中崎（1999）の主張と不一致である．

そして，ムティ（2021）の研究は日本語とインドネシア語の禁止サインを比較し，その結果，日本語の禁止サインは③と④の配慮優先型を多く使用されている傾向が見られる一方，インドネシア語の禁止サインは①と②の効率優先型を使用するものが圧倒的に多いという結果が出た．日本語には，敬語体系が存在し，相手（禁止サインの読み手）のフェイスに配慮するより，「上下関係」や「社会的地位」を表すために敬語を使用しているだろうという結論になった．また，いくつかの鉄道会社の競合関係で，鉄道の乗客に対するサービスとして，敬語が多く使用されている．

5. 問題点

上の先行研究から，鉄道会社の場合，日本語の禁止サインは効率優先型より，配慮優先型の方が多く使用されているが，本研究の対象である観光地はどうであろうか．また，本研究では自治体によって運営されている観光地であるため，客に対するサービスとして敬語が多く使用されているのか，自治体としてのパワーを示し，効率優先型を使用するだろうか．

6. 仮説

上記の問題点を検討するには，以下の仮説を設定した．

（仮説）「効率優先型の方が多く使用される」

自治体というパワーを持つ機関や観光地の単独運営者として訪問客に対してパワーを持ち，配慮優先型表現よりは効率優先型の表現を使用する．

7. 方法

本研究は，それぞれの国の観光地の日本語とインドネシア語の禁止サインを対象にした．観光地は禁止サインの発信者と受信者の間に待遇表現が出現しやすい．また，看板などの受信者である客側が発信者である運営者に対してパワーを有し，待遇表現が認められる．

- 収集場所：自治体により運営されている観光地
  日本　　：上野公園，大阪城公園，兼六園，金沢城公園
  インドネシア　：Kota Tua（コタ・テュア），Tangkuban Perahu（タンクバン・ペラフ），Taman Balai kota Bandung（バンドン市役所公園），Taman Insinyur Haji Juanda（インシニュー・ハジ・ジュアンダ公園）

- 期間：2019 年 2 月～4 月と 2020 年 2 月～3 月
- 収集したデータは（日本：件 728，インドネシア 232 件）エクセルに書き写し，データ化する．

8. 結果と考察

表 1．観光地における日本語とインドネシア語の禁止サインの表現

表現	日本語	インドネシア語

効率優先型禁止表現	［～な］→　「わたるな！」 ［～しない］→　「歩かない　走らない」 ［～しないこと］→　「手すりから体を乗り出さないこと」 ［～厳禁］→　「解放厳禁」 ［～禁止］→「宴席禁止」	Jangan～（しないで）→ 「MAKAN BOLEH, NYAMPAH JANGAN」 飲食はしてもいい，ポイ捨てはしないで Dilarang（禁じられる）→ 「Dilarang buang sampah」 ゴミ投棄は禁じられる
効率優先型非禁止表現	無	Berdiri di atas garis kuning　＜支持＞ 黄色い線の上に立つ
配慮優先型禁止表現	［～おやめください］→ 「大変危険なのでおやめ下さい」 ［～お断り致します］→ 「酒気を帯びた方の入室はお断りします.」 ［～ご遠慮ください］→ 「スケートボードなどはご遠慮ください」 ［～しないでください］→ 「ここにゴミを置かないで下さい」	Mohon untuk tidak～（しないようにお願いします） 「MOHON UNTUK TIDAK MENYENTUH DAN MENARUH BENDA PADA KOLEKSI」（展示物に手を接したり，物をおいたりしないようにお願いします）
配慮優先型非禁止表現	「ゴミの持ち帰りにご協力ください」＜依頼＞ 「園内でたき火はできません」＜不可能＞ 「金沢城公園管理車両専用」＜許可の範囲＞	「Buanglah Sampah Pada Tempatnya」 ゴミをゴミ箱に捨てて下さい＜依頼＞ 「AYO JAGA TAMAN」 公園を守ろう＜勧誘＞

本研究のデータから，禁止サインの４つの表現のそれぞれの分類に当てはまる例を上えの表にまとめた．そして、分析した結果，上記４分類について，日本語は①59%，②0%,③33%，④6.5%，①＋④1.5%で，一方，インドネシア語は①74.5%，②0.5%，③7.8%，④15.6%，①＋④1.6%という結果となった．両言語に，①「効率優先型禁止表現」が最も多く，日本語は 59%，インドネシア語は 75%占めている．その中には，禁止されている内容が生命の危険を及ぼす行為ではない場合でも「効率優先型」を使用しているものもある．これは，中崎(1999)の主張と一致していると言えるだろう．しかしながら，両言語に「配慮優先型」を使用するものも見られるが，日本語の場合，③と④の「配慮優先型」はそれぞれ 33%と 6.5%（合計 39.5%），インドネシア語の配慮優先型の③と④はそれぞれ 7.8%と 15.6%（合計 23.4%）を占めている．

ムティ（2021）の日本語とインドネシア語の鉄道会社の禁止サインの研究結果を見ると，日本語の禁止サインは配慮優先型を使用する傾向がある一方，インドネシア語の場合は効率優先型を圧倒的に使用する傾向がある．しかし，本研究では，両言語とも効率優型と配慮優型を使用する禁止サインが見られ，両言語に効率優先型が最も多く使用され，上記の仮説と一致し，ムティ（2021）の鉄道駅の禁止サインの結果と異なる．

禁止サインの内容から見ると，効率優先型を使用するものには，「火気厳禁」のような危険を及ぼす行為を防ぐものもある一方，「禁煙」や「駐車禁止」などのようなものにも多く使用されている．その他に，効率優先を使用するものは，「自撮り棒禁止」や，「ドローン使用禁止」など，他の客に迷惑をかけるような行為を防ぐための禁止サインが多い．

本研究で使用されているデータは自治体によって運営されている観光地であるため，パワーを持つ機関や観光地の単独運営者として訪問客に対して配慮表現を使用しなくても問題ない．また，禁止サインは社会的ルールや常識，衆多の支持などを背景とするものが多いため，配慮した表現は必要ではない（中崎，1999）．この二つの原因によって，本研究の日本語の禁止サインにも効率優先型表現の方が多く使用されているだろう．

一方，本研究のインドネシア語の禁止サインの結果は，ムティ（2021）の研究結果と一致している．日本

語とインドネシア語ともに効率優先型表現が多く使用されているが，割合から見ると，日本語は 59%であるのに対して，インドネシア語は 75%見られ，インドネシア語の方が，効率優先型表現を多く使用する．その一方，日本語の方が配慮優先型表現を多く使用している．

9. まとめ

ムティ（2021）の鉄道駅の禁止サインでは，日本の鉄道会社には，いくつかの鉄道会社の競合関係によって，客に対するサービスとして丁寧な言葉や表現が使用されるため，禁止サインにも効率優先型表現より，配慮優先型が多い．しかし，本研究の結果では，日本語とインドネシア語の両言語の禁止サインに配慮優先型表現よりは，効率優先型表現ウィ使用する禁止サインが多かった．自治体によって運営されている観光地であるため，パワーを持つ機関や観光地の単独運営者として訪問客に対して配慮表現を使用しなくても問題ない．また，禁止サインは社会的ルールや常識，衆多の支持などを背景とするものが多いため，配慮した表現は必要ではない（中崎，1999）．この二つの原因によって，本研究の日本語の禁止サインにも効率優先型表現の方が多く使用されているだろう．

10. 今後の課題

本研究では，禁止サインの禁止文の部分だけを対象にしたが，より深い分析をするためには，追加情報の部分も分析する必要がある．また，異なる場所（商業地など）での禁止サインも分析し，それぞれの場所の特徴や違いを探り，比較を試みる．最後に，禁止サインの非言語的なもの（文体，色，画像など）は言語的なものと同じようにメッセージが含まれているものの，今まで多くの言語景観の研究は言語的な側面だけに注目し，文体，色，画像などに注目するものが少ない．それゆえに，今後の課題としては，今回分析してみた表現のような言語側面だけではなく，非言語側面の分析も必要である．

参考文献

Badan Pusat Statistik (2016). Profil Penduduk Indonesia Hasil Supas 2015 （インドネシア統計局）「国勢調査」https:www.bps.go.id/publication/2016/11/30/62daa471092bb2cb7c1fada6/profil-penduduk-indonesia-hasil-supas-2015.html（最終閲覧 2020 年 10 月 29 日）.

Brown, P. and S. Levinson (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press （邦訳：田中典子監訳（2011）『ポライトネス　言語使用におけるある普編現象』研究社

藤原智栄美（2004）．「日本語話者とインドネシア語話者の「断り」に関する研究」，大阪大学大学院言語文化研究科博士論文

徐璐 （2014）.「日本語の敬語使用とポライトネス」，『文明 21』33，93-102

岸江信介（2012）.「看板・表示物に見られる禁止表現の言語景観」内山純蔵監修，中井精一，ダニエル・ロング編『世界の言語景観　日本の言語景観—景色のなかのことば』桂書房，218-226.

倉林秀男（2020）.「日本の公共サインのスタイル」，『文体論研究』66，71-78

Matsumoto, Y (1988). Reexamination of the universality of face*: Politeness phenomena in Japanese*. *Journals of Pragmatics* 12, 403-426

ムティ・アフィファー（2021）.「日本語とインドネシア語の禁止サインの比較—駅の禁止サインの「禁止表現」をめぐって—」，『日本語用論学会第 23 回大会発表論文集』，印刷中

中崎温子（1999）．「「禁止/不許可」提示・標識表現の・英語対照分析」，『北陸大学紀要』23，179-189